

歴史的パラダイムのコペルニクスの転換を提起

GN21 代表 片岡幸彦

今

日私たちの世界は、近代欧米文明の鬼子とも言える、グローバル化という新たな怪物に席卷されている。しかし20世紀を支配し、グローバリゼーションを主導してきたアメリカの時代もようやく終焉を迎えようとしている。また一方25カ国から27カ国の連合体に拡大されたヨーロッパも、「古き良き」西欧中心主義からどれだけ脱却できるかは明らかでない。近頃ロシアの復権がささやかれ、中国とインドの台頭が喧伝されるが、その行き先も東アジア共同体の帰趨と共に依然として不透明である。中南米諸国の新しい胎動も取り上げられるが、同じように今なお新旧植民地主義の爪跡が残るアフリカや中東諸国にもまして、状況の改善が期待されるかは不明確である。

こうした今日のグローバリゼーションの現実がもたらしている世界の危うい状況は、単に政治経済の分野だけに止まらない。言わば思想も社会も文化もその魔性に汚染されていることは、一目瞭然見ての通りである。世界はさておき、私たち日本はどうだろうか。残念ながら日本は自ら問題を自分自身のイニシアティブで解決する能力も、

またその機会も与えられていないのが偽らぬ現実ではあるまいか。

まさにそういうときに、私たちは『ブラック・アテナ』に出会った。実はバナールの本書に先立つことおよそ30年、20世紀の後半に活躍した西アフリカ・セネガルの歴史家シェック・アンタ・ディオブ（一九二三—一九八六）は、『黒人国家と文化』（一九五五年）などの著書や講演・インタビューなどを通して、「古代エジプト人は黒人であったこと」、また「古代ギリシャへのエジプトの貢献」などを熱く語っていた。しかしブラック・アフリカからの発言は一部の論壇を除けば、ほとんど無視されてきたと言える。その意味で本書が中近東アフリカ諸国はもとより、特に欧米社会で取り上げられたこと、そして何より本書がアメリカ東部の著名な大学のイギリス人学者によって心血を注いで書かれたこと、つまり欧米社会のまさに内側から、あらためてブラック・アフリカと西アジアによる古代ギリシャへの貢献が実証され、新しい歴史的パラダイムが提起された意義は大きい。言うならば、歴史的パラダイムを問う重要な発言が、奇しくもブラック・アフリカと欧米の二つの文明地域から東地中海のアジア

を舞台に響き合い、結び合ったのである。

今度邦訳版が刊行されるマーティン・バナール著『ブラック・アテナ』第一巻「古代ギリシャの捏造」(1987年、ニューヨーク&ロンドン)は世に出ると間もなく、いわゆる「ブラック・アテナ論争」を巻き起こし、世界の学会や論壇に大きな衝撃を与えた。刊行以来20年を経た今日もなおその議論は熾烈を極め、いまだ決着を見ていない(詳細は日本語版序文及び解説を参照されたい)。事実本書第一巻『古代ギリシャの捏造』は、本書日本語訳を含めるとイタリア語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、スウェーデン語、アラビア語など七ヶ国語に翻訳され、なお中国語、ギリシャ語、アルバニア語などの翻訳が進行中である。著者バナールは、私たち日本人なら誰もが知っている世界史の通念を根底から覆してみせたからである。本書は、近代ヨーロッパ帝国が世界の覇権を手にするおよそ200年の間に、言わば自分たちが世界の中心であることを強調するために、彼らの文化的アイデンティティと僭称するギリシャ文明を白人種だけのものとし、ギリシャ古代史を捻じ曲げた経緯を詳しく述べている(第三章から第十章まで)。

しかし、本書でも明らかにしているように、当時エーゲ海の東西に展開していたギリシャの指導者の多くがエジプトに留学し、そこから知識や教養を身につけ、言わばエジプトやフェニキアの文化文明を引き継ぐ形で、いわゆる古代ギリシャ文明やヘレニズム文化を完成させたことは、実は当時の大方のギリシャの歴史家や哲学者自身が認めていたことなのである(本書第一章・第二章)。

にもかかわらずいつの間にか欧米でも日

本でも、白人優位の「アリア・モデル」が広く普及し、日本の高校教科書新課程「世界史B」でも、相変わらずこのようないささか偏った歴史観がまかり通っている。その背景の一つには、明治以来の欧米に見習い追いつけという日本近代の基本的政策がある。敢えて言えば、「無謀な大東亜戦争」もその一つの結果であり、私たちは今日その敗戦の悲劇と共に、かつて日本が経験したいわゆるアルゲマイゼ・クリーゼ(Algemeine Krise=general crisis)の現実を再び骨身にしみて味わっているのである。私たちは、未来の歴史の捏造とでも言うべき「文明の衝突」論は論外であるとしても、「文明の対話」や「文化の共生と和合」への努力を緊張緩和と世界融和の重要な一里塚としなければならない。そしてそのなかで、力の支配、格差の拡大再生産、そして生態系を破壊し続けるグローバリゼーション問題の解決が図られなければならない。

したがって私たちは、本書を単なる「古代ギリシャ史の捏造」を解明した専門書としてのみ読んだのではない。実は本書が提起した古代史をめぐる新しい世界史観は、近代欧米文化文明が500年の歴史を通して世界に果たした意味を問い、上でも述べたグローバリゼーションが支配する21世紀世界を私たち一人ひとりが生きるために、自分たちのものとしなければならない新しい価値観や文明観、さらには世界観の創造へと繋げるものとして、本書をあらためて発見し、読んだのである。本書の読者の皆さんには、著者マーティン・バナール本人が5月に来日する機会に(詳しくは3頁を参照)、是非私たちと問題認識を共にしていただければ幸いである。

マーティン・バナール著『ブラック・アテナ』

第一巻 『古代ギリシャの捏造』 刊行記念シンポジウム

ご来場自由

グローバルネットワーク 21 では、『ブラック・アテナ』邦訳刊行を記念し、シンポジウムを開催することとなりました。当初は原著者のマーティン・バナール氏の来日も決定し、具体的な段取りに取り掛かろうとしていた矢先、同氏より背中痛等悪化のため入院加療の連絡がありました。私たちは慎重に協議を重ね、同氏の健康を最優先し、今回の来日は断念せざるを得ないと判断いたしました。なお、氏は来日を強く希望しておられますので、今後あらためて来日の手はずを整えたいと考えております。又近くニューヨークに邦訳本を持って氏を尋ね、状況を把握すると共に、最新のメッセージを携えて、シンポジウム当日に皆様にご披露申しあげる予定です。

刊行記念シンポジウムは予定通り以下の要領にて行う所存です。日本を代表するギリシャ史の専門家、最近古代ギリシャを訪ね歩いた著名作家を初め、台湾からの気鋭の研究者をもお迎えしての開催ですので、どうか奮ってご参加くださいますように。なお、ご来場の方には、当日受付にて4月25日刊行の『ブラック・アテナ』第一巻『古代ギリシャの捏造』（新評論刊、670頁、定価6500円+325円）を特別価格（二割引き）にて頒布させていただきます。

記

日時：2007年5月8日（火）

午後1時半より、30分の休憩を挟んで、最大5時半までとします。

場所：京都駅前京都タワーホテル6階ナポリの間

開会の挨拶：板垣雄三氏（東大名誉教授）

シンポジウムのテーマ：「『ブラック・アテナ』と21世紀の世界」

司会と問題提起：幸泉哲紀氏（元オハイオ州立大学・龍谷大学教授、GN21 副理事長、第一巻の「解説」担当）

パネリスト：桜井万里子氏（ギリシャ史、東京大学名誉教授）

小田実氏（作家、第二巻序文執筆）

李有成氏（リー・ユーチェン、台湾国立中央研究院欧米研究所長）

單徳興氏（シャン・テシン、同研究員、サイドの専門家）

問い合わせ先：GN21 大阪事務所

〒532-0002 大阪市淀川区東三国 2-9-17-1002

電話&ファックス 06-6396-6671

Email: webmaster@gn21.net

内からのグローバリゼーション

—相互依存世界における文明の混成性の受容と超越—

GN21 副代表 幸泉哲紀

19

90年頃から多くの論者の関心を惹き、21世紀の世界における現実として広く認められるようになってきているグローバリゼーションは、主としてグローバル・キャピタリズムの進展による経済生活における変化と見られがちであるが、世界のどの社会においても個人の生活のすべての側面に影響する広範にして、複雑な社会変化である。その変化の広範さと複雑さは、上からの、下からの、外からの、そして内からのグローバリゼーションという、多面的な社会変化として捉えることができよう。

アメリカを始めとする第一世界の多国籍企業やIMFやWTOといった先進諸国の利益を推進すると見られがちな国際機関が関わっているという意味で、西洋先進諸国以外の人々からすれば、これまでのグローバリゼーションは上からの、また外からのグローバリゼーションであったと言えよう。これに対して、非西洋諸国だけでなく、西洋諸国でもNGOなどが、住民の発意に基づく地域社会の自主性を取り戻すために、下からのグローバリゼーションの活動を行ってきたことは、GN21のものも含めて、すでに多くの文献が取り上げている。ここでは、「内からのグローバリゼーション」が何を意味するのかについて考えたい。

どの個人も、社会生活の単位という意味でのある文明のなかで社会生活を送っている。ここで文明とは、一定の風土のもとで、文化、経済、政治が織りなす社会システムのことであり、それは自然環境と他の文明との関係においてオープン・システムである。オープン・システムとしての文明は、他の文明との関係において、

征服と抑圧、植民地化と搾取、吸収と改善、交換と相互育成、という4つの型の対応をもつ。5000年を超える文明の歴史を通しての文明間のこうした対応の結果、その度合いは文明により異なり、また文明の要因の間でも異なるけれども、今日ではどの文明も純粋な文明ではなく、混成文明となっている。

「内からのグローバリゼーション」にとって大切なのは、グローバリゼーションがもたらした相互依存という世界の現実のなかで、文明の内部構造である文化において共有できる価値を見いだすことと、文明と位相的に同位である個人の精神世界においてそれらの価値を実現することである。混成文明であるどの文明も、相互依存世界での文明の共存につながるグローバル文明にとって必要な価値—持続性、社会性、精神性という3つのS (Sustainability、Sociability、Spirituality)—を潜在的に保有しており、これらの価値を自らのものとして育成していくことが文明レベルでの「内からのグローバリゼーション」である。そして、これらの価値を内在的な価値として実現することが、個人にとっての「内からのグローバリゼーション」である。端的に言えば、「内からのグローバリゼーション」とは、文明の混成性を受容し、超越することである。

最後に、これは10月28日の研究会で発表した論文の要旨を述べたもので、詳しい議論については当日配布した論文を参照されたい。

脱アイデンティティと「内からのグローバリゼーション」

GN21 副代表 松本祥志

モ

ノは、風、水、大地、光のような「始原的なもの」であれ、人間の労働によりそれから剥がし取られた作品であれ、糧や道具として人間によって享受されるので、他に帰属先を求める必然性はない。それに対し人間は、モノを享受するとき享受のためだけにエゴイストに享受し、目的も帰属先もない単なる戯れとして趣味的に生きるが、その内側には他者との出会いを源としないものは何もない。西洋近代では、出会いによる他者の迎え入れにおいて「私は誰か」が問われてきた。

一人ひとりのアイデンティティには、性や民族などの集团的側面と、感性や感覚などの個別的側面とがある。個別的側面は、受け入れ容量を溢れだす過剰な差異のもたらす羞恥による「自己的なもの」の破壊拡大により変革できるが、集团的側面は選べない。後者の集团的アイデンティティの構築は、学校、民族、国家などの提供する概念でなされるが、対立する集団に承認されなければ完成しない。倭人の同化政策に抵抗するアイヌがその集团的アイデンティティを構築するには、倭人に抵抗すると同時に、承認を求めて隷属しなければならない。抵抗する相手に隷属するのはボヘミア的アイロニーである。

近代社会において自己は、対立する他者の集团的アイデンティティを承認しないか、歪曲して承認するかの何れかであり、他者は脱アイデンティティに向かう。だがアイデンティティの否定は、アイデンティティと脱アイデンティティを同時に含む潜在性の一つの顕現に他ならない。潜在性とは現実の中に求めえないことの追憶であるが、追憶に同一のも

のはなく、また追憶は各瞬間を新たな差異として現在時の中に導き入れるので、差異である。差異は否定より深い。

グローバル化に抵抗するアイデンティティを構築するには、ロックやヒュームのように自己と他者の狭間で「私は誰か」を問うことで脱アイデンティティに無力化され、グローバル化の激流に回収されるのではなく、それらの潜在性として自己と他者を同時に含む「生とは何か」を問わなければならない。

生は一つの不変な本質なのではなく、果てしない運動である。もし不変な本質だとしたら、生にとって最も死活的な問題である死の時期も不変なはずである。しかもパンはパンを食べさせてはくれないし、パンを食べていても死ぬときは死ぬので、人間による享受は隷属でも依存でもありえず、外部という他者に他動詞的に自存する分離かつ結合の能動である。他者との間に「関係なき<関係>」を構築する自存によって、自己は閉鎖的な空間やドグマ的な「一主義」に囲い込まれることなく、遠く隔てられた近接性において他者と分離かつ結合する「差異の共同性」にそのアイデンティティを飛び込ませうる。この明かしのえない多産的な「共同性」という無限に向かう超越こそが、「内からのグローバリゼーション」である。



仏教思想と「内からのグローバリゼーション」

GN21 理事長 北島義信

内

からのグローバリゼーションを考
える場合、明治までは最も身近な
思想であった仏教に、そのヒント
の一つがあるように思われる。日
本の仏教にほぼ共通に見られる概念は「空(く
う)」であろう。「空(くう)」とは、自己中心
主義・自己の独存的絶対化からの解放を意味す
る。その解放の前提となるのは「相依」
(inter-dependence)であり、「縁起」
(para-tantra)と呼ばれるものである。paraは
サンスクリット語で「繋がり、接触」を意味し、
tantraは「理論」を意味する。したがって「縁
起」と「相依」は同義である。いわゆる初期「大
乗仏教」の確立者である南インドの龍樹(150
-250年頃)は『廻諍論』で次のように述べて
いる。「もろもろの存在が他によってあるこ
とが空性の意味である、とわれわれはいうので
ある。他による存在には本性(自性)はない」。

すべての事象が相互関連・相互依存の状態
にあるということは、他者なしには自己は存
在しないことであり、相異なるものが自己存
在のために相互に依存関係にあるということ
を意味する。西洋近代は、相異なることを
「優劣」関係として位置付け、両者を二分し
「優者」の「劣者」支配を合理化する。しか
しながら、相異なることは優劣関係ではなく、
「他者」は第二の自己であるがゆえに、他者
と自己は平等の関係でもある。インドの思想
に「バクティ(bhakti)」という概念があるが、
これは本来、人間の肉体諸器官の繋がりを表
す言葉である。それぞれ機能が違う諸器官が
繋がり合うことによって、はじめて一個の人
間が存在し得るのである。ここには違いを認
めあう平等の関係が存在する。サンスクリ
ット語では、「知ること」はjna(ジュニャ)
という語で表現される。Jna(ジュニャ)に
「外を」意味する接頭語vi(ヴィ)がくっつ
いたvijna(ヴィジュニャ)は、「科学・学問」

を意味し、「内を、内から」を意味する接頭
語pra(ブラ)がくっついたprajnaa(ブラジュ
ニャー)。「内を見ること、知ること」は、「智
慧」を意味する。(親鸞はこれを目覚め体験、
「信心」と呼んだ)。人間にとって、「知ること」
にはこの一体となった二面が必要であ
って、「外を知る」ことだけに限定せず、「内を、
内から」知ることにも必要である。このような
「知り方」によって「相互関連・相依関係」
が主体的に把握できるのであり、ここから
「私心」を離れた他者救済の行動としてのカル
マ・ヨーガ(karma-yooga)が可能となる
のである。この「prajnaa(智慧)」「bhakti(相
依関係・他者理解)」「karma-yooga(私心な
き行動)」は分離不可能な一体となったもの
であり、ヒンドゥーと仏教に通底する思想で
ある。

このような考え方は、仏教やインド思想に固
有のものではない。イスラームにおけるタウヒ
ードという概念の意味は、「多様性を認めつつ
一つにする、一つと考える」ということであり、
その概念は「等位性」「差異性」「関係性」によ
って構成される。また、ブルガリア出身のツベ
タン・トドロフは、自己のアイデンティティを
捨てることなく、他者を認める思想がヨーロッ
パにも存在していることを論証している。これ
らの概念はアメリカ中心のグローバリゼーシ
ョンを支える「アメリカ的価値観の絶対化」に
抗する「内からのグローバリゼーション」の実
例となり得る。



台湾高雄にある仏法山の阿弥陀仏立像

とあるアジアの原風景—高雄旅情^{カオシュン}

GN21 常任理事 山本 伸

台

北のど真ん中に位置する松山空港から飛行機で50分、台湾第二の都市高雄に着いた。途中機内から線路だけ見えた新幹線だと、台北から一時間半の距離だ。飛行機から降りたとたん、期待はずれの寒さに思わず皮のコートに首をすぼめる。インターネットでは25度以上とあったのに、とんだ当て外れだ。2年前にホノルルで手に入れたお気に入りのアロハまで用意したというのに、いったいこの寒さは何なのだ。

自分が少し間抜けに思えてきたそのとき、到着口に背の高い女性が待っているのが見えた。ひとまずアロハシャツのことは忘れることにして、はじめて会ったカオシュンの人との会話を楽しむ。彼女は高雄師範大学の助教授、専門は私と同じカリブ海地域の文学である。幸か不幸か、私がさほど興味のない作家が研究対象だった。

彼女の大学院の教え子が車を回してきた。生まれてはじめてのカオシュン。台湾は五度目だが、台北とその近郊から出たのはこのときが最初だった。行ったことのない土地に足を踏み入れるのは実にいいものだ。いつもわくわくさせてくれる。

私たちを乗せた日本車がにぎやかな通りに滑り出た。飛ぶように過ぎていく風景のひとつひとつに目をやりながら、彼女の流暢な英語によって少しずつヴェールを脱ぎはじめた未知の街カオシュンを、車窓から楽しむ。

「台北に比べて田舎でしょ？」と助教授。

「いやいや、高いビルは多いし、立派な都会ですよ」。私は正直にそう答えた。

しばらく高速道路を走ると、車は巨大な門の真下で停車した。見上げると、それは大学の正門だった。近くからはとてもカメラに納まりきらないほどの大きさに驚いている私にふたたび助教授が話しかけた。「これが私の大学。とても小さいでしょ？」。

意外な言葉に思わず面食らっていると、さらに運転手の女子学生が追い討ちをかけた。「そう、とっても小さな大学」。



小さな(?) 高雄師範大学の正門

二人の言葉を大きさに打ち消しながら、ふと私は同じアジア人としてのつながりを直感していた。カオシュンの街も大学もきっと本当は誇りに思っているであろうに、あえてそれを表に出さずにむしろ少し卑下するように言う。その物言いは、私が幼いころ、訪ねてきた人に「何もなくしてほんとに悪いねえ」と言って、多様な野菜の漬物を山盛りに出していたときの祖母のそれに重なった。

自己を出すこと、ときには他者を押しのけてまで前に出ることが賛美すらされる、そんな今の世の中にあって、台湾第二の大都市カオシュンには、われわれが忘れかけていたアジアの原風景があった。

*これは5月来日予定のリー・ユーチェン博士の計らいから、台湾中央研究院歐美研究所および国立高雄師範大学にて「東洋は書き返す—カリブ文学におけるアフロ・アジア的要素」と題した学術講演を行った際の紀行文である。本研究会理事長の北島義信氏も「日本における黒人研究」と題して同じく講演し、台湾のトップ研究者らとの懇親を深めた。このような草の根の日台研究者交流は、今後も公私共にすすめていきたいと考えている

『ブラック・アテナ』目次

日本語版への序文	マーティン・バナール
本書刊行にあたって	片岡幸彦
序文および謝辞	
本書における音声表記と転写法について	
地図と表	
年表	
解説	幸泉哲紀
序章	
第1章 古典古代における古代モデル	
第2章 エジプトの英知とその後の西欧へのギリシャ人による伝播	
第3章 17～18世紀におけるエジプトの勝利	
第4章 18世紀におけるエジプトに対する敵対意識	
第5章 ロマン主義言語学—インドの上昇とエジプトの下降 1740-1880	
第6章 ギリシャ至上主義 その1—古代モデルの衰退 1790-1830	
第7章 ギリシャ至上主義 その2—古代学のイギリスへの伝播とアリア・モデルの興隆 1830-1860	
第8章 フェニキア人の興隆と衰退 1830-1885	
第9章 フェニキア問題の最終的解決 1885-1945	
第10章 戦後の状況—穏健アリア・モデルへの回帰 1945-1985	
結論	
補遺 ペリシテ人はギリシャ人だったのか?	
原註	
参考文献	
用語解説	
索引	

今後のGN21 活動予定

次回研究会／日 時：3月24日（土）午後4時～6時

場 所：難波「カフェ・ド・ラ・ペ」（Tel:06-6644-1248）

<http://www.kohmei.co.jp/cafe.html>

会 費：1,200円（飲み物と洋菓子又はサンド代）

テーマ：内からのグローバリゼーション（その3）

発表者：坂口倫崇氏「内から響鳴する音を聞く—地球化時代の新しい作曲技法」（序論）

八木啓代氏「民族音楽と世界音楽—揺れるアイデンティティ」

*いずれも音楽ライブを含みます。

問い合わせ先：GN21 大阪事務所 06-6396-6671

グローバルネットワーク21 ニュースレター 第8号

発行年月日 2007年3月19日

編集・発行 グローバルネットワーク21 編集部

発行責任者 山本 伸（やまもとしん）

〒510-8512 四日市市萱生町1200 四日市大学環境情報学部 北島研究室気付 GN21 編集部

<http://www.gn21.net>

TEL:059-365-6588 / FAX:059-365-6617